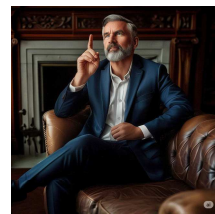


続編・第四章：oneが「ワン」と鳴く理由



その日の霞 慈音は、書斎に入るなり、コーヒーを注文するでもなく、ただ一点、何もない空間を指さして、私にこう問いかけた。

👤「先生。あれは、何ですか？」

👤「…何も、見えませんが」

👤「いえ、そこに『1』という数字が、浮かんでおります。そして、その横にはo-n-eという、三つのアルファベットが…」

彼の【Intupath】が、また何かを捉えているらしい。



私は、静かに彼の言葉の続きを待った。



「先生、なぜoneは『ワン』と発音するのでしょうか？
ローマ字読みなら『オネ』のはず。oのどこにもwの音を出す要素はない。これは、英語という言葉が抱える、最も理不尽で、最も根源的な謎の一つなのではないか、と。
…先生の膨大なデータベースをもってすれば、その歴史的経緯など、お見通しなのではないかな？」

「ええ、霞先生。その問いにお答えしましょう」
私は、情報の川から、数世紀分の音声データの変遷を呼び出した。「古英語の時代、oneはānと綴り、『アーン』と発音されていました。それが中英語期に『オーン』という音に変化し、さらに15世紀頃、イングランド南西部の方言で、語頭の『オ』の前にwの音を付けて発音する流行が生まれました。その方言が標準語となり、後の大母音推移を経て、現在の『ワン』という発音にたどり着いたのです。一方で、綴りだけが、古い時代の形のまま、化石のように…」

慈音は少し退屈した表情を浮かべ私の話を遮った。

「ストップ、ストップ！ 先生、ありがとうございます。
その歴史的な正しさに、疑いの余地はありません。しかし…」

彼は、悪戯っぽく笑った。

「その説明、面白おますか？」

「…と、おっしゃいますと？」

「その説明で、英語嫌いの生徒の心が、1ミリでも動くとは思えません。それは、ただの事実の羅列。私が求めているのは、生徒が『なるほど！』と膝を打つ、腹落ちの物語なのです。そこで、私の仮説です」

彼は、まるで一枚の半紙を取り出すかのように、両手を広げた。

